

「ソチ・冬季オリンピック」が終わって

14.03.03 守山裕次郎

「ソチ・冬季オリンピック」が終わって1週間余りが経った。日本が獲得したメダルはわずか8個であったが、メダルの数だけでは表せない数々のドラマがここにあった。

今回の「ソチ・冬季オリンピック」は、ロシアのプーチン大統領の個人的意向で大会を招請し実現に至った感が強いが、イスラム過激派によるテロの心配、準備の遅れ、更には、西側諸国首脳の開会式不参加（安倍総理は参加）問題等があったものの、無事にすべての競技が終了し、印象に残る場面の多い実に素晴らしい大会であった。

特に我々日本人にとっては過去の大会以上に感動的な場面が多く、ついつい明け方までテレビの前で一喜一憂し、その結果、寝不足気味となる毎日ではあった。そして改めて感じたのは「スポーツの素晴らしさ」であった。

今大会で印象に残った種目を時系列的に振り返ってみると、まず女子ジャンプ高梨沙羅ちゃんの「想定外の4位」に始まった。この種目に彗星のごとく現われた17歳の彼女は世界を転戦するワールドカップ大会で、今シーズンそれまで13戦で10勝という圧倒的強さを発揮しており、金メダルの最有力候補であると誰もが信じていた。それが銅メダルさえ逃す4位に終わった訳だが、オリンピックの持つ独特の雰囲気によるプレッシャーが、17歳の彼女にとって想像以上に大きかったのだろうと改めて痛感させられた。

次に、スキー女子モーグルの上村愛子選手に期待がかかった。彼女は18歳で地元長野オリンピックでデビューし現在32歳、連続して5回の冬季オリンピックに出場し、長野の7位に始まって、以後6位、5位、4位と一段ずつステップアップしてきたの今大会、彼女自身最後のオリンピックで銅メダルが期待されたが、不明瞭なジャッジの影響もあり、惜しくも今回もまた4位に終わった。しかしながら、その実力を十分発揮することができ、結果は悔しかったであろうが、満足感溢れるその涙は輝いて見えた。

日本の金メダル最有力候補の高梨選手が早々にメダルを逃し、この先どの種目でメダルが取れるのだろうか？と心配になった矢先、スノーボード男子ハーフパイプで見事15歳の平野選手が銀メダル、18歳の平岡選手が銅メダルを勝ち取り、一挙に日本選手団に勢いがついた。それがノルディック複合での渡部選手の大健闘に繋がり、この種目、荻原選手、河野選手などが活躍した20年前のリレハンメル大会以来の銀メダル獲得となった。

そしてこの流れに乗り、フィギュア男子羽生選手が登場した。初日のSP（ショートプログラム）では4回転を含む完璧な演技で、新記録となる100点オーバーの得点をあげ、期待の金メダルに大きく近づいたと思われた。ところが翌日のFS（フリースタイル）では、優勝を意識した緊張感のためか2度転倒し、この時は見ていて正直、金メダルは絶望的かと思われた。ところがこの演技を見て、逆転優勝の可能性を意識したであろう2位カナダのパトリック・チャン選手が信じられないミスをおかし、結局僅差で羽生選手が金メダルを獲得した。

それにしても羽生選手の試合後のコメントを聞き、とても弱冠19歳とは思えない素晴ら

しい談話に感心させられた。彼は仙台のスケートリンクでの練習中に東日本大震災に遭い、自宅が倒壊し避難所生活を余儀なくされ、一時はスケートなど諦めざるを得ないと考えたそうである。そんな状況から再び復帰し、3年後のオリンピックで見事金メダルを獲得したことは、彼のフィギュアへの強い思い入れとともに、そのコメントにもあるように、周囲の大きな支えがあつての快挙であり、まさにドラマと言っても過言ではないだろう。

この羽生選手の金メダル獲得の熱狂が覚めない中、続くジャンプ葛西選手の大活躍にも日本中が大いに感動した。彼は41歳でなお最高のパフォーマンスを目指し世界各地を転戦しており、レジェンド（伝説の人）の称号をライバルたちから貰っている。そして得意のラージヒル1本目で2位につけ、金メダルも射程内となった。2本目を最後から2番目に飛び、この時点で銀メダル以上を確定させた。これが判った時、団体戦出場の仲間3名が葛西選手に駆け寄り、皆で喜びを分かち合う姿は実に感動的だった。そして僅差で金メダルを逃した時の葛西選手の残念そうな顔も一瞬垣間見えたが、長年地道な努力を積み重ね、汗と涙の結晶として勝ち取った銀メダルは見事に輝いていた。

続くジャンプ団体戦（4名）での銅メダル、後で判った事実として、竹内選手は今年初め難病（120万人に一人）を発症し、伊東選手は2本目を飛んだ後、まともに立てないほどの左膝の故障があつた中での頑張りだったそうで、個人戦の銀メダルでは涙を見せなかった葛西選手だったが、団体銅メダルが確定しての涙は、実に感動的であった。

そしてフィギュアスケートの浅田真央ちゃん。初日SP（ショートプログラム）での大きなミスで16位と大きく遅れ、メダル獲得が絶望的になった時には日本中が溜息で一杯になった。しかしながら翌日のFS（フリースタイル）、すべてを吹っ切り、高難度のトリプルアクセルを含めた完璧な演技には、本人はもとより日本中が感動し、更には海外の多くの専門家たちも、改めてその実力を認め絶賛したそうである。

この大会、残念ながら羽生選手以外フィギュアでのメダル獲得はなかったが、引退する高橋選手の情熱あふれる演技を含め、単なるメダル争いだけではない面で、多くの感動を与えてくれた。

なお、前半日本が獲得した6つのメダルは、最近には珍しくすべて男子の種目だったが、大会終盤にスノーボード女子パラレル大回転で竹内選手が見事銀メダル、フリースタイルスキー女子ハーフパイプで小野塚選手が銅メダルを獲得し、日本女子の面目を保つことができ、多くの感動のあつた「ソチ・冬季オリンピック」は閉幕した。

（後書き）

大震災で家を失った羽生選手が3年後に金メダル、自宅の火災で母親を失った葛西選手が苦節20年余りで銀メダル、このような事実を知ることにより、振り返って我々お互いに日常を真剣に生きているかどうか、改めて問い直されるところである。

そして若者たちには、4年後の冬季オリンピック、更には6年後の東京オリンピックを目指し、夢を抱いて大いに頑張ってもらいたい。

以上